

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ **亀水の百手祭(弓射)を観る**

講師 立山 信浩 (『笠居郷探訪』著者)

日時 平成30年2月4日(日)



共 催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

1 はじめに 下笠居亀水町へようこそ

◎下笠居（しもかさい）

その昔、笠居山（勝賀山）を取り巻く位置に笠居郷・笠居村がありました。やがて笠居村は、南部の上笠居村（鬼無）、北東部の中笠居村（香西）、西部の下笠居村の三村（笠居三村）にわかれ、香川郡に属していました。下笠居村には川窪、植松、中山、生島、亀水（たるみ）の大字（おおあざ）がありました。

昭和三十一年（一九五六）九月、高松市が周辺町村を広域合併したとき、下笠居村も香川郡から離れて高松市に入りました。高松市との合併に際して村は解消され、旧大字を中心に現在の神在川窪町、植松町、中山町、生島町、亀水町の五町（通称下笠居五町）が生まれました。

旧笠居三村のうち、上笠居と中笠居（香西）では町制移行に際して、「笠居」という旧村名を残す配慮はなされなかったのに対し、下笠居村は「下笠居」という歴史的名称を校区名、公共施設名、地元企業名などとして積極的に残しました。

◎亀水（たるみ）町

もと下笠居村亀水。昭和三十一年（一九五六）九月三十日、高松市亀水町となりました。

高松市の最北西部に位置し、西は坂出市に接しています。地下（じげ）、弓弦羽（ゆずりは）、

塩家、小坂の四つの地区からなります。

域内の中央部を亀水川が北流して亀水湾に注いでいます。亀水湾は、西を大崎鼻、東を紅峰（このみね）に挟まれた遠浅で波静かな入江であり、かつては高松藩内でも早い時期に築造された塩田（亀水浜）がありました。

亀水湾の外海には、大槌・小槌の二島（無人島）と槌の戸があります。小槌島は亀水町に属しており、小槌神社が祀られています。

亀水町は、亀水川源流のフタドシと亀水川、槌の戸などを舞台にして、数多くの豊かな伝承を持ちます。貴重なモモテ神事も残されています。

亀水と書いてタルミと読む地名の由来には、次のような諸説があります。

（一）『香西記』の解釈：「たるみ」はもともと垂水と書いて、垂れ落ちる水＝滝を意味する古語。ここでは亀ガ淵（龍ガ淵）の大亀の伝承と結びついて、たるみを亀水と表記した。

（二）『高松地名史話』の解釈：都が干ばつとき、阿利真という人が滝（亀水）の水を引いて孝徳天皇の御殿の飲料水を確保した功により、垂水（たるみ）公の姓を授けられた。その子孫が讃岐に移り住んだことから、その姓が地名となった。その後、源流地域であるフタドシの大亀伝承と結びついて垂水（たるみ）が亀水（たるみ）と表記されるようになった。

2 北坂一帯　　出発地点です

◎北坂(きたさか)

亀水峠。切り通し。小坂から塩家へ越える亀水町内の峠で、北の紅峰(こうのみね)と、南東の黄峰(おうみね)を結ぶ稜線上の鞍部に位置します。戦後しばらくまでの北坂は今より高い位置にあり、強い風が吹き抜ける厳しい峠で、交通の難所でした。

「県道高松・坂出線の亀水峠は、その坂路が急勾配のため交通に支障が多かったので、切下げ工事が数回実施されたがなお充分ではなかった。村民の要望で昭和二十六年頃から三力年の継続事業で、県費で改修工事に着工し、小坂に面したS字形カーブを拡大した。」

(下笠居村史)

【もとの北坂の高さは今より二十メートルは高かったな。坂は急やし、風はきついし、北坂は厳しい坂であったナ。いや、ほんまにきつい風がよう吹くんよ。今みたいに広々とした峠と違う、山が迫って関所みたいになった峠だったから、風の通り道になって、風の日の北坂を越えるんはホンマにきびしかったんよ。

峠は少しずつ何べんも切り下げたと聞いたとるけど、最終的に今の高さに切り下げたのは、昭和三十年を過ぎた頃だったナ。そのあと、一気に峠の幅を広げる工事に入って紅峰のスソも、黄峰のスソも徹底的に削られた。削った山土（やまつち）は生島へ降ろして、塩田の埋立に入れたんヨ。」

現在の北坂（亀水峠）の紅峰側（北側）と、黄峰側（南側）が大きく切り広げられているのは、昭和四十六年（一九七二）に廃止された生島塩田の埋立用土砂の採掘跡。それまでに繰り返された峠自体の切り下げ工事とは関係ありません。

◎むねのおつぞうさん（峰のお地蔵さん）

亀水町北坂（亀水峠）に建つ堂中地蔵の古名、俗称、そして愛称。「むねんさん」とも呼ばれていました。現在の名称は北坂地蔵。台座右側に「文政四年辛巳（一八二二）七月一日」、左側面に「塩浜講中」とあることから、約二百年前に塩浜講中（塩田関係者）によつて建立された地蔵であると分かります。

峠が切り下げられる前は、現在より二十メートルも高い旧北坂（亀水峠）の稜線上にありました。今と同じく「北向き地蔵」でした。

◎紅の峰（こうのみね）

コウノムネ。高松市亀水町の独立峰。東紅（ひがしこ）と西紅（にしこ）の二つのピークを持ち、最高地点は東紅の二四五メートル。

もと紅峰山上には、亀水城（勝賀城の出城）や亀水のお薬師さんと呼ばれた小庵（興願寺の元寺）がありました。

◎黄峰（おうみね）

黄峰山。おみね。おうむね。標高一七四・六メートル。山頂部に黄峰城跡があります。

◎黄峰城（おうみねじょう）

黄峰山頂にある中世山城（やまじろ）。香西氏の家来が交代勤務する出城であったといわれています。山頂部に城跡を全周する大規模な石塁が残り、狼煙台（のろしだい）跡もあります。石塁は一メートルㄱ一・六メートルの高さで全周五百メートルに及びます。

黄峰城へは、黄峰の南山麓、浜街道下の蓮如堂脇から登ります。

3 加茂神社 くらももてを鑑賞します

◎賀茂神社（かもじんじや）

加茂神社。京都の上賀茂神社と下賀茂神社の総称。総本社は賀茂別雷（カモワケイカヅチ）神社（通称上賀茂神社）で、祭神は雷神であり、雨と治水をつかさどるカモワケイカヅチの神。

ここから全国に分霊された賀茂神社は、祈雨、止雨、河川、農事、産業の守護神として崇敬されています。

◎亀水の加茂神社（たるみのかもじんじや）

建仁四年（一二〇四）、福家の城主新居藤太夫資幸（茂幸だともいう）が京都下賀茂神社の祭神を勧請して創建したと伝わっています。もと下笠居村の村社。現在は亀水町四地区（地下・弓弦羽・塩家・小坂）の氏神。

社殿は、はじめ北坂の西にありましたが、戦火に遭い焼失。大永元年（一五二二）、現在地に移して再建。寛文四年（一六六四）の「寄せ宮の藩命」を免れて、社地が亀水に残ったといわれています。

加茂神社の運営は、伝統的に「八名（はちめい）」と呼ばれる加茂神社の宮守の合議によって行われます。亀水町内の四地区から各二名ずつ選出された宮守「八名」によって構成される集まりは「亀水組」とも呼ばれます。

加茂神社は、江戸期から昭和戦後期にわたり百二十点を超える貴重な地域資料である「亀水町共有文書」を今日まで保管継承してきた神社でもあります。

加茂神社の御旅所（おたびしよ）は、神社の西正面、宮西橋たもとの亀水川沿いにあります。

神社のすぐ下の加茂会館は、かつての下笠居小学校亀水分校の跡地に建てられています。亀水分校は、昭和三十六年（一九六一）三月の廃校まで約九十年間、旧村内の西部三地区（地下、弓弦羽、塩家）の子弟の教育に当たりました。

毎年二月第一日曜（もとは旧正月）に、百々手（モモテ）祭、四月第一日曜に井上祭、十月に秋季大祭を行います。百々手祭と井上祭にはモモテユミ神事が奉納されます。



◎モモテユミ

百々手弓。百手弓。モモテ。古くは「神の的」ともよばれました。その年の豊凶を占う早春の祭（百手祭）で行う弓射の神事であり、悪魔祓いの神事でもあります。

モモテユミ神事は、県内では三豊郡を中心に西讃地方で盛んに行われます。高松市内では下笠居地区亀水の加茂神社と七面さん（七面神社）で行われています。平成十六年（二〇〇四）からは香西宇佐神社の春祭りでも行われるようになりました。

二隻（二本）の矢を手と呼び、矢二本を一手といいます。モモテ（百手・百々手）とは、二本の矢を百回射ることをいいます、したがって、正式な百手は二百回の弓を射ますが、神事として行われている現在の百手は弓の本数にこだわっていません。



はじめに弓を射る前の儀式が、公家流弓術の作法を心得た指揮者によって進められます。やがて、十人の射手が五人ずつの上矢（うわや）と下矢に分かれ、持参の弓を指揮者に預けます。指揮者は上矢の五人に弓を射る順番を指示し、射手は順次に二本ずつの矢を射ます。再び上矢の五人が弓射し、次いで下矢の五人が二度目の弓射に移り…というような作法が繰り返されて、魔除けの儀式であるモモテは進行していきます。じっくり見学してください。

「右に記す神の射る日は、この場所に多くの人が見物に集まるといふことだ。隣村の生島の人も集まってきたり弓を射る。男はもちろんのこと、女たちも背中に子をおぶって集まってくる。子供たちは、射捨てられた的を持ち帰るといふ。持ち帰った的を家の門口に掛けておけば、自然に不吉なものが家内へ侵入するのを防げるのだという。二十四、五年も昔のことだというが、疱瘡が流行したことがあって、隣の生島村では幼児の多くが病死した。このとき亀水（たるみ）の若者たちが申し合せて、賀茂神社で神の射（モモテ）を射たところ、道ひと筋距てたこちら側の亀水村へは疱瘡の流行がなく、まれに百人に一人ほどが疱瘡になっても病状は軽く、命を取られた子供は一人もなかったと、土地の者が語ってくれた。その後も、流行病があるときは神の射を射ると必ず効果があるといふことだ。」

（木村黙老『聞くままの記 亀水村神の射の記』読み下し文）

◎井上さん（いのうえさん）

井上助衛門重実（いのうえすけえもんしげざね）の下笠居での愛称。室町幕府の臣で、戦国の世に亀水に住んでいたといわれています。弓術に優れ、里人に公家流弓道を教えました。亀水を去った後、三百余町歩の山林を亀水の村林（共有林）として贈り、そのため亀水が裕福な在所となったと伝えられています。

◎井上氏遺徳碑（いのうえしいとくひ）

亀水町民に尊崇される室町幕府の臣、井上助衛門重実の遺徳碑。明治三十三年（一九〇

〇）建立。亀水加茂神社の境内に建っています。



【碑文】

「井上氏遺徳碑　香川県治（県都＝高松）を距（へだ）てた西北二里許（ほど）に香川郡亀水村がある。紅峰を負い香浦に面し民戸二百五十、共有山林三百余町、林木はすくすくと育ち草も豊かに茂るため、薪を採り獸を捕る収入で租税を払うことができ、その余剰は村全体の均等な利益になった。そういうことだからどの家も、どの村民も不足なく暮らしていた。数百年來税を払えずに他所へ出て行く者もいなかった。こうしたことは、村民誰もが井上氏のお陰であると思っている。伝えられるところによれば、井上氏の名は重実（しげさね）、室町氏（＝足利將軍家）の御家人である。かつて都を出て流浪しこの亀水を治めた。人柄は弓術に優れ、何枚も重ねた板を射抜いて一本の矢も射損じることにはなかった。村社である加茂神社に毎月二月一日に弓を射るしきたりがあった。魔性をはらい災難を遠ざけるといいうわれがあり、神的の射と呼ばれた。そこで重実が村民に弓術を教えたが、的の狙い方、弓矢の上げ下げ、技量精神も上達し、古くからの作法が守り伝えられて今日に至っている。重実の家は貧しかったが、名誉と節操を砥礪（シレイ・修養し研ぐこと）していた。かつて粟六石を里人から借りたところ、ある者がこのことを公表して重実を辱めようとした。重実はこれを恥じ、家を片付けて夜逃げをし、遂に筑前（福岡県）糟屋の山中に仮住まいした。この山には豺狼（サイロウ・山犬とオオカミ）が多く人々は大変困っていた。重実は役所に申し出てこれらを退治し、役所は重実に土地を与えた。そ

の土地は犬無しが原と呼ばれた。このあとすぐに重実は亀水の山林の全てを村民に贈り、とりあえずこの山で粟の借りを返したいと伝えた。以後、このこと（亀水が山林を所有すること）はしばしば書証で確かめられ、村民は今に至るまで永くその利益を頼みとしてきた。以上が井上氏を深く敬う理由である。先ごろ村民が相談の結果、加茂神社の社前に石碑を建て、井上氏の遺徳を明らかにしようということになり、県知事である私に碑文を書くように要請があった。私は已に井上氏がよく廉隅（レングウ・けじめ）を修するを寄とし、又村民が物事の始めに返って祖先の徳を追慕供養する心に打たれて、あえて不文であるからと辞することをせず、話の梗概（あらまし）を文章にして石を刻んだのである。

明治三十三年（一九〇〇）十月仲浣（中旬）

香川県知事正五位勲四等 荒川義太郎撰並題額 香川県属藤脇善政書」

（亀水町加茂神社に建つ「井上氏遺徳碑」碑文の読み下し）

※難読語の意味を補い、碑文にない句読点と西暦年号を添えた。

◎亀水町共有文書（たるみちよう きょうゆうもんじょ）

亀水加茂神社に保存されていた江戸期から昭和戦後期にわたる計百二十五点の地域資料。長く「亀水組所蔵文書」と呼ばれ、地域社会が自ら管理、保存してきた貴重な資料群。中でも厳重な木箱に密封して守られてきた生駒時代の「折り紙状」二通は、生駒藩主が亀水村地下の百姓に亀水山（亀水共有林）の使用特権を認めた保証書であり、貴重な歴史資料である。平成十七年（二〇〇五）二月に結ばれた亀水組と香川県の寄託契約により、全ての文書は「亀水町共有文書」として香川県立文書館に寄託されている。

◎亀水の共有林（たるみのきょうゆうりん）

五色台黒峰の山頂に近い北斜面に広がる亀水地区所有の山林。古文書にはカマクロ石から北、水落（みずおち）から南と書かれており、黒峰山頂の北斜面から瀬戸内海歴史民俗資料館の南にかけて約三百町歩。

伝承では、室町時代、亀水に住んで公家流弓術を伝えた井上重実が筑前に移り住むときに亀水村に寄贈した山林であるといわれています。

後に、生駒親正、一正、正俊の三代藩主から亀水村地下に使用特権を認める「折り紙状」が出されており、以後藩政時代を経て明治以降も慣行が認められて亀水町の共有林とされています。

4 亀水川流域と地下（じげ）

ゝ亀水川に沿って歩きますゝ

◎亀水川（たるみがわ）

亀水町地下を北流して弓弦羽（ゆずりは）と塩家（しおや）の間で亀水湾に注ぎます。流路延長二・五キロメートルは、住吉川に次ぐ下笠居で二番目に長い川です。

源流地域はフタドシと呼ばれ、その中のジョウガブチ（龍ガ淵・亀ガ淵）やヒミズの滝一帯は多くの伝承の舞台。亀水川河口（亀水湾）の外は、大槌・小槌の二島がある槌の戸（つちのと）の海域。すなわち、フタドシと槌の戸は、亀水川によつて結ばれています。

・伝承によれば、槌の戸に棲む龍は、龍が淵の真水を飲むために亀水川をフタドシまで上るといいます。亀水川が、フタドシと槌の戸をつなぐ川であることから生まれた伝承です。

・現在の亀水川は、平成十七年（二〇〇五）に亀水町の有志が結成した「きすい会」の努力によつて、ホタルが飛び交い、アユが泳ぐ清流に変わりつつあります。

◎フタドシ山（ふたとしやま）

フタドシ。双俊山。二歳山。亀水川源流一帯の山群の総称であり、特定的一座だけを指す名称ではありません。浜街道のトンネルの前（旧料金所辺り）から西、南方向に見える急峻な山並

みの全体がフタドシ山。

フタドシ(フタトシ)の語源については「毎年きれいに草木を刈ってしまっても、二年分も伸びた草木のように大きくなる。土地が湿り気を保ち肥えているので、刈りつくしても再び元氣よく草木が繁茂するのでフタドシ山と呼ばれるようになった」(香西記)という説や、「急峻なこの山での山仕事は、寿命が二年(フタトシ)も縮むほどきついからフタドシ山という」とする説、この山の秋の紅葉は冬に落葉せず、翌年にもまだ美しく残っていてフタトシ(二年)の紅葉を楽しむことが出来る山だから、という説などがあります。

【浜街道のトンネルの前に料金所があるだろ。あそこから見える山が全部フタドシの山よ。あの中のどれか一つだけにフタドシ山という名前が付いとる、というンではないのよ。つまり、フタドシ山という名前の山はない。フタドシの山というのが正確な言い方だと思うよ。】(※浜街道料金所は平成二十三年三月に撤去されました。)

【下笠居ではフタトシではなく、フタドシという。「フタドシはとんでもないところ。フタドシは、とんでもないものが棲んでいるから、近づいたらいかん。入ったらいかん。」と言われた。フタドシと聞いたら「怖い場所」という印象が強い。】

【下笠居に住んでいても、亀水川の源流のフタドシは、聞いたことはあっても入ったことはなかったです。浜街道のトンネルが通って、車の中から見たのがフタドシを見た初め

てです。子どもの頃から聞かされていた怖いイメージが強いからか、今でも車の中から見
るフタドシは、どこか凄味がある。五色台には、あれほど手つかずの山は他にないですよ。
樹木の茂り方がすごいですよ。浜街道ができなかったら、あんな近い距離からフタドシを
見ることができたと思えない。そう思いませんか？」

◎浄ガ渚（じょうがぶち）

龍ガ渚。亀ガ渚。蛇ガ渚（ジャガブチ）。亀水川上流にある深渚。大亀が棲むとも、龍が
棲むとも伝えられています。また、槌の門（つちのと）に棲む龍神が真水を飲むために亀
水川を上って浄ガ渚に来るという伝承もあります。古くから亀水地区にとっては、雨乞い
神事を行う大切な場所とされています。

地下（じげ）集落が、ジョウガブチで最後に雨乞いを行ったのは昭和四十八年（一九七
三）八月、「高松砂漠」の年です。

※浄ガ渚を亀ガ渚とも龍ガ渚とも呼ぶのは、亀も龍も、ともに「この世」と「異界（こ
の世の外側にある領域）」を自由に出入りする能力をもった特別な動物と考えられ、敬われ
てきたことによると思われます。ちなみに浦島太郎を竜宮に連れて行ったのは亀でした。

また、亀は人間の寿命を遥かに超える長寿が可能な特別な動物であると考えられ、古く
から信仰の対象でもあります。

《浄ガ渚には片目のウナギが棲んでいるが、取って食べてはならない。苔が生えた大亀も棲んでおり、大亀が棲んでいる穴からはたえず真水が流れ出ている。その水は亀水川を伝わって海に流れ出る》

《浄ガ渚は大槌・小槌の間にある槌の門（つちのと）に通じている。》

《槌の戸に棲む龍は、のどが渇くと真水を飲み、浄ガ渚（龍ガ渚）にやって来る。だから、干魃の年に浄ガ渚の水を部落総出で汲み出して、淵底に積み上げた麦わらに火をつけて燃やせば、必ず雨が降る。どうしても真水を飲みたい龍神が、大雨を降らせて浄ガ渚のわら灰を洗い流してくれるからだ》

◎ヒミズの滝（ひみずのたき）

日見ずの滝。陽見ずの滝。滝はフタドシ北面の亀水（たるみ）川源流近くにあり、一日中陽光が射さないことから「ひ（日・陽）見ず」の滝と言います。冬は氷結することもあります。

伝承では、ヒミズの滝は、大槌・小槌の槌の戸（つちのと）と地中でつながっており、龍（大蛇）がこの滝と槌の戸を往き来するといっています。

【ヒミズの滝には近づいたらいかんと昔から言われとるのに、どこかの男が滝を見に登って行ったんやと。滝の近くと思うところまで登ったら、雨が降ってもないのに、雨降り音がサラサラサラサラといつまでも続くんやと。滝の音でもないし、おかしいなと思つて見上げたら、なんか白いものが頭の上でサラサラサラと動いているんやと。初めは何か分からんかったけど、大きな蛇の腹が頭の上を動いていると分かって腰が抜けたんやと。どっちが頭でどっちが尻かも分からん大きな蛇の腹の下で、その男は声も出せんで震えていたんやと。ヒミズの滝は大槌小槌とつながっているから、普段は海の底におる大蛇（おおへび）が、ときどき滝の中から出て山を動くんやと。だからヒミズの滝には近づいたらいかんのやと。】

◎大槌島（おおづちじま）

備讃瀬戸の中央にある標高一七〇mの円錐形の島。南に並ぶやや小型の小槌島と合わせ、古くは兄弟島、経が島とも呼んでいます。大槌島と小槌島の間の海峡が、竜王宮があると伝わる槌の戸です。

島は、享保十七年（一七三二）九月に出された大曾の瀬（おおそのせ）漁場争いの判決によって南北に折半され、以後南半を笠居郷香西浦（現在は高松市亀水町一四四八・一香西財産区が管理）、北半を備前日比浦（玉野市日比）が所有しています。

◎小槌島（こづちじま）

大崎の鼻の四〇〇メートル沖合に浮かぶ無人島。標高一・三メートル。槌の戸を隔てて北に隣り合う大槌島とともに、二島あわせて兄弟島とも呼ばれます。

◎地下（じげ）

高松市亀水（たるみ）町の四字（あざ）の一つ。かつての亀水本村であり、亀水四字（あざ）の中では最も古い集落。地下（じげ）の中央部を亀水川が北流しています。

地下（じげ）とは、もともとその地に住んでいる者、土着の者という意味。そこから転じて周域の中で最も早くから集落地となった地域を、周辺の集落地に対して地下（じげ）と呼んで区別することがあります。

※集落としての地下（じげ）は、本村（穂村）と同義。本村から派生して後に生まれた新村は枝村といえます。弓弦羽、塩家は新村です。

◎興願寺（こうがんじ）

紅峰山興願寺。浄土真宗興正寺派。本尊阿弥陀如来。高松市亀水（たるみ）町地下（じげ）にあり、下笠居三か寺の一つ。

寺伝によれば、もとは紅峰（こうのみね）山上にあつた小庵であり、亀水庵、薬師庵、亀水のお薬師さんなどと呼ばれていたといひます。その後小庵の脇に勝賀城の出城、亀水（たるみ）城が築造され、香西氏の家臣が交代で警護していました。城は天正七年（一五七九）長宗我部元親軍の兵火に罹り焼失したが、焼失を免れた薬師庵は江戸中期に山裾の亀水（たるみ）川沿いに下ろされ、さらに寛政初期に現在地に移りました。

昭和二十一年（一九四六）七月、西本願寺派として寺格を得て興願寺となりました。

◎興願寺の梵鐘（こうがんじのぼんしょう）

薬師庵時代の梵鐘は昭和十八年（一九四三）に軍に供出されたまま戻らず、各地の寺院と同様に梵鐘を持たないまま戦後を迎えました。

戦後は昭和二十二年（一九四七）九月、香川県立工芸学校校長小倉右一郎の作による梵鐘が納められていました。その



後、県内外の多数の「工芸学校梵鐘」は次々に姿を消したが、興願寺では、歴史的に意義深い「工芸学校梵鐘」を大切に保存しています。

現在の正規の梵鐘は平成元年（一九八九）鑄造の新しいものです。現在も毎日朝七時に時鐘を打っています。

《戦争の施設・設備もどん底の時代、帝展審査委員長まで務めた小倉右一郎が（工芸学校）校長として着任する。：校長小倉は学校再建の資金捻出のため寺の梵鐘作りを思い立ち、生徒と共にこれに全力をあげることとなる。以下、当時の四国新聞の伝えるところである。

『高松市の工芸学校は「梵鐘学校」といわれているが、母校を思う老彫塑家校長と自力復興をねらう学徒のたくましい復興意欲から釣鐘製作を思い立ったもので、校長小倉右一郎（六十七歳）が、戦時中つり鐘を供出した寺院に再び平和の鐘を復活させるとともに戦災にあった母校の復興費を捻出しようと鑄造、工芸両科職員、生徒にはかったところ全員賛成し、実習をかねた釣鐘製作が開始されたのであるが、最近まで八十貫から二百貫くらいの各種釣鐘四十二個、半鐘八個を造り、今後毎月十個を目標に製作を続けると言っている。かくて売り上げのうちから早くも三十万円でモーター工作機械、ろくろなどを買って

学校施設を整備し、机、イスも実習を兼ねて生徒が自給自足しており、吹きさらしの窓には全部ガラスが入って学校の越冬準備もOKとなった。』…』
(高松工芸高校百年史)

◎タグリ神さん(たぐりがみさん)

たぐり地蔵。咳(せき)の神、ぜん息(タグリ)の神。笠居郷の各地に小祠があります。片方の草履をもって祈願のお参りをし、風邪引きやタグリが治ったらもう片方の草履をもってお礼のお参りする慣行がありました。亀水のたぐり地蔵は「地下(じげ)の寄せ地蔵」とも呼ばれます。

村境に祭られる地蔵(境目地蔵)が関(せき)の神であることから転じて咳の神、タグリ神さん、タグリ地蔵となる例もあります。

《昔は風邪をひいても咳き込んでも、病院や行かしてくれるもんナ。地下(じげ)のタグリ神さんに連れて行かれてお参りするだけ。子供の頃、ワラジを片方だけ持って何べんお参りさせられたことか。タグリ神さんのぐるりには、ワラジやぞうりが盛り上がるほどあったワ。岡山の方から船でお参りにくる人もあった。あそこは、とにかく風が吹き付け

る寒い場所です。お参りしたらまた風邪ひくと思うんですけど、なんでか知らんけど治ったなア。今ごろは、ワラジは見かけん。サンダル二足くらいあがっただけじゃ》

5 亀水橋（たるみばし）

↓ 解散地点です。↓ 苦労様でした↓

- ・バス停亀水橋から、帰りの高松行コトデンバスに乗れます。
- ・バス停亀水橋の西わずか六十メートルほどに、バス停弓弦羽（ゆずりは）があります。
- ・帰りの高松行コトデンバスの始発駅です。
- ・バス停弓弦羽（ゆずりは）の西わずか三十メートルほどに亀水運動センター（バラ園）があります。公園内の体育館にはトイレがあります。
- ・解散地点（亀水橋バス停）から県道を車で西に一〇分で、大崎の鼻です。坂出市との境であり、小槌島、大槌島の展望地です。

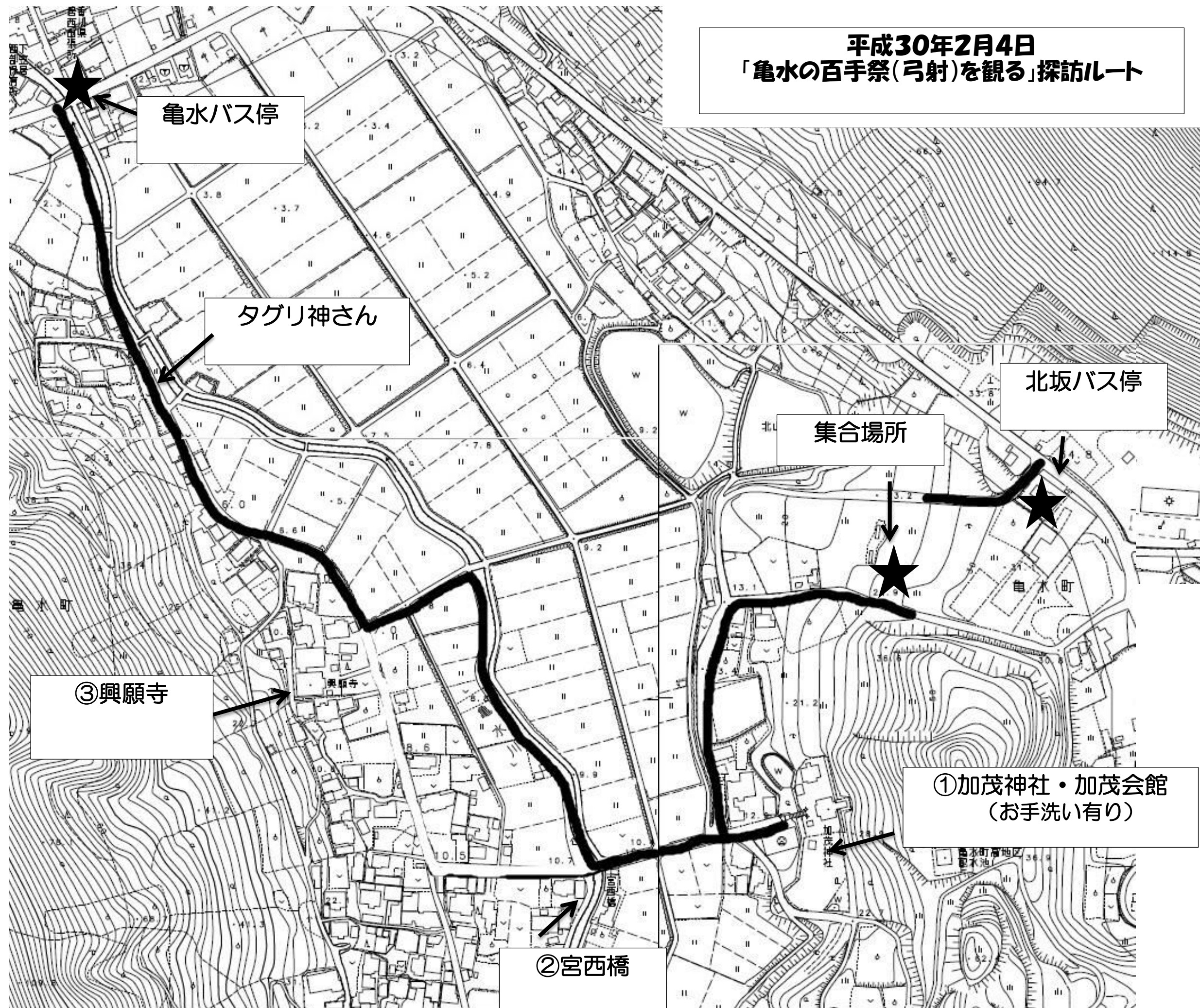
参考文献

『笠居郷風土記』高松市西部民俗調査団 一九八六

『郷土史事典 香川県』市原輝士他 一九七九

- 『郷土史事典 笠居郷探訪』立山信浩 二〇一四
- 『下笠居探訪』下笠居地区地域興し推進協議会 一九九六
- 『下笠居村史』下笠居村史編集委員会 一九五六
- 『創立百年誌 高松市立下笠居小学校』一九八七
- 『伝説百話』北条令子 一九八三
- 『中土堤にまつわる推理と考察』青木恵 二〇〇九
- 『私の地区史』青木恵 二〇一一
- 『読み下し 聞くままの記』木村黙老原著 一九九三

平成30年2月4日
「亀水の百手祭(弓射)を観る」探訪ルート



2月4日（日）復路

◆ことでんバス

24 歯科医療センター・イオン高松東店（瓦町経由）
（亀水） （瓦町）※高松駅には停まりません
15：10発 → 15：42着

14 高松駅（宮脇町 県庁・日赤前経由）
（亀水） （高松駅）※瓦町には停まりません
15：35発 → 16：14着

次回のふるさと探訪は…

テーマ 「岡本から川部を歩く」（予定）

とき 平成30年3月11日（日）9：30～正午頃

集合場所 未定

講師 川崎 正視 さん（高松市文化財保護協会事務局長）

参加費 無料

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」3月1日号に開催案内を掲載しております。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうかが御不明な場合、午前7時30分～開始時間（9時30分）までに文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。

（電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。）

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気を
つけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。